

# 差別の砦を落す

——チャールズ W. チェスナットの  
『伝統の精髓』——

安部大成

## 1

『伝統の精髓』(1901年)は、主として、白人女性オリヴィア・カーターレット(以後、オリヴィア)が、彼女の混血の異母妹ジャネット・ミラー(以後、ジャネット)に対して抱く差別観念を克服する過程と、彼女の夫、政治、経済界の実力者、フィリップ・カーターレット(以後、カーターレット)が差別キャンペーンと画策した人種暴動とによって、白人至上主義政策を貫徹させることに成功した日、ジャネットの夫、彼にとって義兄弟に当る黒人医師、ウィリアム・ミラー(以後、ミラー)の前で露呈することになる、彼の差別の思想と行為の敗北とを、差別される側に置かれたジャネットとミラーの社会的地位の向上と解放への意欲、およびカーターレット、ミラー両夫婦の、人種の相違を越えた、人間性の発露とに相関させて描いたものである。

『ヒマラヤ杉の蔭の家』において、人種差別観念の強いトライオンはレナに対する彼の愛と差別との対立によって激しい心の葛藤に見舞われることになるが、彼が差別と反差別との内面的抗争を体験するには、まず彼がレナを愛してしまうことが前提である。そして極めて不自然なことであるが、トライオンのレナに対する愛の始まりには条件がついていて、それが彼の差別者たる理由であるが、彼にとってレナは白人でなければならないのである。

彼女が白人として通る“黒人”であることが分っていたら、彼は全く関心を示さなかったか、エド・グリーンと同じ次元の、性的関心を持つにとどまるか、人種融合に対する否定的な感情を触発されるか、およそそのあたりに落ち着いたであろう。レナは白人として通る女性であったが故に、ブランチュ・レアリイと比較される、白人女性として、トライオンの心の領域に入ったのである。トライオンの愛と差別との内的抗争は、そこから開始され得たのである。

レナは死に至るまで「愛は勝利者<sup>(1)</sup>」であることを疑わず、また、兄のジョン・ワウウィックも「愛は偉大な平等主義者<sup>(2)</sup>」であると信じている。二人は父が残した蔵書の幾冊かによって、そのように学んだのだが、それを何によって確信し得るか、と問えば、彼等の両親、白人の父と混血黒人の母によってであろう。それはまた、チェスナット自身が同じく学び、確信したことでもあった、と言い得る。彼の祖父は白人、祖母は混血黒人であったのだから。さらに附言すれば、彼は、白人社会の用語を使えば、白人として通る“黒人”でもあった。

『ヒマラヤ杉の蔭の家』において、チェスナットは、人種の相異を妨げとはしない男女間の人間愛を、差別の思想、観念を主体的に打ち砕く上で、最もダイナミックな力を持った **Leveler**=水平にする人(物)・平等主義者 とし、これに最高の信頼を置いたのである。

人種、民族、身分を妨げとせず、若い男女が愛によって結合する事は人類の共同の体験として、歴史的に、現実的に存在する。一方の予期せぬ死によって、未完に終わったにせよ、ジョージ・トライオンとレナ・ウォールデンとは23歳と18歳の若者であり、愛は恋愛感情を伴って、平等主義者として充分その力を発揮し得るであろう。

ところが、『伝統の精髓』におけるオリヴィアとジャネット、カーターレットとミラーとの関係には、一方の側の差別思想と観念によって、姉妹愛も友愛も閉ざされている。オリヴィアは黒人を母に持つ異母妹を忌避する。カーターレットはミラーをはじめ黒人全体を白人の支配下に屈服させようとする。

カーターレット夫婦の愛は結婚後、遅い時期に生れた一人息子、フェレック

スに注がれている。カーターレットはカーターレット家の嫡子の将来のためにも、社会のあらゆる分野に白人支配の体制を確立したいと考える。

オリヴィアはフェレックスが生れ育つウェリントン市に、ジャネットがいることを強く嫌悪する。

二人の父性愛、母性愛は彼等の差別思想と観念を緩和するどころか、それを一層強めてしまう。

チェスナットは、カーターレットの差別思想と行動の破綻を、社会生活の構造と機能の面で、オリヴィアの差別観念克服の過程を家の歴史と彼女の精神生活の面で究明して行くが、勝利者であり、平等主義者であるところの、人間性に根ざす愛に、人間の存在に内在する死を「偉大な平等主義者」として新たに加え、カーターレットの差別思想と行動そのものの敗北と、オリヴィアの差別観念に対する勝利との転機を、二人が愛するフェレックスに、刻々と迫って来る死に求める。

オリヴィアはジャネットの姿を偶然見かけるだけで、精神的衝撃をうける。それ程、彼女の異母妹に対する嫌悪感は深く、複雑である。彼女の出産が予定よりも異常に早められたのも、子供をつれて散策するジャネットを目撃したことによる。

ジャネットはオリヴィアの父サミュエル・マーケルと彼女の母エリザベスの召使い、若い、肌色の明るい混血黒人女性ジュリア・ブラウンとの間に生れた。サミュエルがジュリアと余生を共にしようと決心したのは妻エリザベスがオリヴィアを残して他界した後のことである。6歳であったオリヴィアはエリザベスの妹ポーリー・オーチルトリイに引き取られ、マーケル家を出ることになる。

サミュエルがジュリアに心を引かれ始めるのは、二度の離婚歴があって、異性の後を追う性向のあるポーリーが、オリヴィアの養育を口実に、妻の座を占めようと試み、さらに嫉妬心から、ジュリア・ブラウンの解雇を要求し出した

ときである。彼はその時、ジュリアなしに暮すことの出来ない、心の状態にあることを知る。黒人女性に心を寄せる彼を激しくなじったポーリィは強引にオリヴィアを引き取って行ったのである。

サミュエルはジュリアの正当な求めに応じて正式に結婚する。そして新しい人生を歩むことになる。間もなくジャネットが生れる。ジャネット・ブラウンとしてではなく、ジャネット・マーケルとしてである。この三人に不幸が訪れるのはその頃である。サミュエルが急病で倒れ、帰らぬ旅に立つ。

死の近づく床でサミュエルはジュリアに、結婚証書、遺産相続書、遺書の所在を明らかにしておいて他界するが、これを部屋の入口で盗み聞きしていたポーリィは、これらの書類を密かに奪い取る。そして、ジャネットとジュリア・マーケルを無権利状態にしておいて、着の身着のまま、マーケル邸から追い払い、代ってオリヴィアと共にその邸宅に移り住むことになる。

オリヴィアはこれらの事実を全く知らないでいる。

オリヴィアのジャネットに対する嫌悪は三つの要因がある。いずれも黒人に対する差別観念を土台にしているが、まず、ジャネットとの間に血縁的に存在する姉妹関係がそれである。彼女は、ジャネットが黒人の血を引く故に、妹として認めることが出来ないが、事実として存在するところの異母姉妹の関係は消し去ることが出来ない。これは自己矛盾から生ずる自己嫌悪と言ってもよい。

もう一つはこの姉妹関係に社会関係が介在していることである。オリヴィアは妊娠した時、女性として最も信頼を寄せ得る人を求め、出産に備えた。その女性はマミー・ジェーンであって、黒人である。彼女はエリザベスとオリヴィアの、かつての乳母で、フェレックスの世話もする。人種差別観念の持主であるオリヴィアは決してマミー・ジェーンを嫌悪しない。それは、マミー・ジェーンが人間としての諸権利は生れながらにしてないものと自ら決めており、主人たる白人に、忠実に、従順に献身し、そうすることによって主人の恩恵に浴し、生活してゆくところの、白人によって“古き良き時代の黒人”として称讃

される人物の一人であって、黒人を“劣った”被造物と考えているオリヴィアの観念に合致するからである。

ジャネットは内心ではオリヴィアを姉として慕っているが、未だ一度も彼女と社会的にも個人的にも交渉をしようと試みたことはない。だが、この女性は北部で教育を受け、人権思想を身につけている。差別制度『ジュリア・ブラウン』が存在する街に住んでいても、決して差別に合意しない。オリヴィアはこの平等思想の持主を嫌悪している。

最後の要因はジャネットを通して喚起されるところの父サミュエル・マーケルと母の召使いであった黒人女性ジュリア・ブラウンとの関係である。

白人男性と黒人女性との性的関係は南部白人女性にとっては、彼女達に加えられるこの面での強い社会制約も伴って、心を深く痛めつける性質を持っている。奴隷制の時代には、白人の男性は自由を奪われている黒人から、その女性まで奪った。奴隷制廃止後においても黒人女性を妾にする、あるいはこれと婚外交渉を持つ男性の存在する社会で、白人女性はその貞潔を美化され、強制されて来た。この南部白人女性の心境を W. J. キャッシュはつぎのようにとらえる。

「だが、若しそのような女性が、自分の台所にいるメイドが実は自分の娘の異母妹であると知ったら、また自分の夫が時々寝室を抜け出して、混血の女中と抱き合っているのでは、と怪しんだら、あるいは自分の息子や身内の男性について、このような事実を知ったり、怪しんだりするだけでさえ、当然のこと、彼女は、最も大切な、心の奥深い領域で、その情感をひどく傷つけられるのである。<sup>(3)</sup>」

父サミュエルが母の死後とはいえ、その召使いと共に暮して、一児をもうける関係にあったとは、オリヴィアにとって、心安からぬものがあつたであろう。彼女は、兩人種間の同棲、結婚を法律で禁じている、1890年代末の南部社会に生きているのであり、その上彼女は人種差別観念が強いのである。

結局はオリヴィアはジャネットを忌避することになる。

この作品において、1898年、ノース・カロライナ州ウィルミントン市で発生した人種暴動が取り上げられていることはよく知られている。

チェスナットはこの人種暴動を題材に使う、人種差別が支配階級の政治政策の一つとして仕組まれたものであることを明らかにする一方、この人種暴動を作品の枠組にして、そのなかで、主として、個人が差別を克服する、あるいは差別から脱却する過程を描いたのである。作品がその場を設定している、「189-」年の「ウェリントン」市は、1898年のウィルミントン市が想定されている。従って、当然のことながら、人種関係を規定する法制上の条件は1890年末の南部諸州のそれを念頭におく必要がある。

フィリップ・カーターレットはカーターレット少佐と呼ばれる如く、かつて奴隷制度を守るべく、アメリカ連合のために献身的に戦った経歴の持主であり、強固な白人至上主義者である。彼は州の保守政党の事実上の機関紙となっている『モーニング・クロニクル』の経営者、編集長として政界に大きな影響力を持っている。彼の政党は前回の州選挙において、黒人の支持をうけた共和党、ポピュリスト人民党の両党からなる連合派に敗北し、州庁機構の人事が入れ替り、末端部署に多くの黒人がその地位を占めることになった。

彼は、黒人は心身共に白人に劣っており、政治に関与する資格を持たず、両人種は政治的、社会的に優劣関係を保つことによつてのみ、平和的に共存し得る、と考えている。そこで彼は次回の州選挙において保守政党の議席を増加させ、法律を改定して黒人から参政権を奪い取ることを政治目標とし『モーニング・クロニクル』を通じて黒人に対する反感を高める運動を行っている。

彼にとって、黒人に一定の部署を与えた連合派が占めるウェリントン市政は許し難く、その勢力を近い内に暴力的に一掃する計画が立てられている。彼の白人支配体制確立の願いはカーターレット家の嫡子フェレックスの誕生によつて熱を帯びて来る。

フレックスは生後6カ月頃、玩具の玉を胸につまらせて呼吸困難に陥る。カーターレット家の主治医プライス博士が治療に当るが切開手術が必要であり、この面での専門医バーンズ博士がフィラデルフィア市から招かれる。ウェリントン市に向う列車内でミラー博士に出会った彼はかつての弟子であり、胸部手術の技術で高名なミラーに協力を依頼する。ミラーはウェリントンに帰着してから手術の用意をととのえ、一足遅れてカーターレット家を訪問することになる。

駅に出迎えたプライスはバーンズがミラーに協力を求めたことを知って非常に困惑する。彼は、診察と手術をうけるのが白人女性ではなくて、白人男性の、しかも幼児であるから、これと黒人医が接触し、問診しても、実質的には、人種を上下に分け隔てるどころの、社会的境界は、これを損うことなく維持し得るのではないかと考えもする。ところが、カーターレット家にはウェリントンの主だった医師が集っていて、自らをリベラルであると自認するプライス自身は別として、他の三人、ダドレイ、ホーパー、アッシュは黒人医と協同することは無論、同席することさえ拒否する恐れが充分ある。それどころではない。カーターレット自体が厄介なのである。

「何故なら彼は、黒人を白人と平等な人間として認めることになるような、あらゆる事態に対して、カーターレットがゆるがぬ敵意を抱いているのを知っていたからである。いかなる黒人も、未だかつてその玄関口から、カーターレット邸に入ったことはなく、一度、用件があって玄関口を訪れ、裏口に廻れという命令に憤慨した、運のない黒人が、無造作に、手すり越しに、回廊の外の棘バラの茂みに投げ込まれた、というのがウェリントン市の伝説になっている。ミラーが洗面器か手術用のガーゼを手渡す、手伝いとして行くなら、支障はあるまいが、外科医としては——……」<sup>(4)</sup>

プライスはミラーをめぐって生ずる騒動の責任を避けるべく、一応バーンズに対して、ミラーを同伴することは南部の慣習に反する旨話しておくことになる。バーンズはミラーの技術と才能を必要とするのであって、偏見よりも実用

を優先させるべきであるとの意見を述べ、ミラーの協力を求める考えを変えない。結局、ミラーの処置について、カーターレットとバーンズが対立する。

カーターレットは言う。

「フィラデルフィア市やウィーン市の慣習はどうであれ、南部においては、白人の患者の治療に黒人医師は呼ばないのです。黒人がその種の職務で、私の家に立ち入ることは、私が許しませんよ。」<sup>(5)</sup>

プライスはカーターレットの側に立って釈明する。

「彼にはいくつか原理があるのです——それを偏見と呼びたいければ、そう呼んでもらってもよろしい——……その原理の一つは、……黒人の社会的平等を断じて容認しない、というものです。」<sup>(6)</sup>

これに対してバーンズは、手術を成功させるにはミラーの協力が必要であり、人種偏見に道をゆずることは、彼の原理として不可能である、という立場を崩さない。

カーターレットはその差別性の故に窮地に立たされる。押問答を続けていると息子の容態は悪化する。そのうちミラーもやって来て、表の玄関のドアをノックするであろう。

彼は息子の生命を救うには北部の医者 of 要求に応じて、みじめな気持ちに甘んずる外あるまいと考える。それは私的な事柄である。ところが、そこには、白人至上主義者カーターレットにとって死活の原理が内蔵されている。バーンズの要求を受け入れると、黒人の社会的平等を断じて容認しないという、彼等が奉信するところの南部白人社会の原理なるものを彼自身が破ることになるのは避け難い事実なのである。

カーターレットはバーンズと対立するところの原理の問題から、ミラーの件を切り離し純然たる私事の問題にすり替える道を探り出す。

「カーターレット夫人にとっては、ミラーが来ることは、他の理由で、不愉快極まりないものであろう。ミラーの妻は、カーターレット夫人が身内のことで苦しんだ出来事を物語る、生きた証拠であって、それはその医師の往診

によって否応なしに思い起されよう。<sup>(7)</sup>」

カーターレットはブライスの助けもかりて、ミラーの問題をカーターレット家の純然たる家庭問題に帰着させることに成功する。バーンズはミラーの件から手を引き、ミラーの訪問を玄関口で断わる口実はブライスに一任される。患者の容態が急変し、ミラーを待てずに医師団が治療中である、と言われて門の外へ出たミラーはカーターレット家の黒人使用人によって事実を知らされ、深く心を傷つけられる。

ジャネットは姉の夫、カーターレットの行為に対して、初めて、その正当な怒りを向けることになる。そして、オリヴィアと彼女との認知されない姉妹関係が夫、ミラーを排外する、悪意にみちたものになっていることを知る。

〔注〕

- (1) Charles W. Chesnutt, *The House Behind the Cedars* (The Gregg Press, 1968), p. 75.
- (2) *Ibid.*, p. 82.
- (3) W. J. Cash, *The Mind of the South* (Pelican Books, 1973), p. 105.
- (4) Charles W. Chesnutt, *The Marrow of Tradition* (Arno Press, 1969), p. 68.
- (5) *Ibid.*, p. 71.
- (6) *Ibid.*, p. 71.
- (7) *Ibid.*, p. 72.

## 2

独り暮しているポーリィ・オーチルトリーは老年になって、頭脳の働きが衰え始めたのであろう、人前でも見境がなく、私事に関することを、夢まどろむ如く、一方的に喋り出すことがある。

オリヴィアが気晴しに彼女を馬車で連れ出した日、オリヴィアはジャネットに出くわして顔をそむけて避けるのだが、ポーリィはジャネットであることを、黒人の御者に教えられると、彼女に関して、重大な秘密事項としてかくし

ておいた事実の一部を大声で喋り始める。

ポーリィはサミュエルの死んだ日、出向いて行って、ジュリアとその幼児ジャンネットをマーケル邸から追い出したばかりではなく、資産を守り、オリヴィアが今日もその邸に住めるようにしておいたというのである。

オリヴィアは父サミュエルの死後、今日まで、夫と共にこの父が遺した邸宅で暮している。マーケル家の財産はすべて彼女が相続し、その一部で夫を援助し、『モーニング・クロニクル』社を創立させたのである。

家族の秘密が黒人御者に知れるのを恐れた彼女はポーリィを家に連れもどす。

マーケル家の唯一人の相続人であると思込んでいた彼女は、ポーリィの言動に不安を覚え、伯母を誘導して、過去の出来事を語らせる。

死が近づいたのを知ったサミュエルはジュリアを病床に呼んで言い残す。

「……枕の下にある鍵で、隣室の机の錠を開けて、右側の二番目の引き出しを見てごらん。書類が三通入った封書が入れてあるのだよ。一通はお前のもの、もう一通には誓約したことが書いてある。あとのものは昨夜記した手紙なんだ。私が息を引き取ったすぐに、封書はその裏に書いてある所へ持って行くのだよ。一刻でも遅れを取ったら、一生後悔することになるよ。その封書を届けてしまうまで、何も喋ってはいけない。その後は助言に従って動いたらいいのだ、——お前が酷いめに会わないように、私の友人が助言してくれようから。」<sup>(1)</sup>

これを部屋の戸口で立ち聞きしていたポーリィは、ジュリアに気づかれぬよう、隣室に忍び込み、机の引き出しから、封書を盗み取ってかくしてしまう。姉エリザベスの生存中、マーケル邸に出入りしていた彼女は邸宅の内部にくわしく、錠も容易に扱える種類のものであったのだろう。

やがてジュリアの慟哭が聞え、サミュエルに死が到来したのを知ったポーリィは、今しがた訪れて来たかの如く装って、彼の病室に入って来る。

『マーケル氏の容態はどうなの？』 私は中へ入って行って問いただしたのよ。

『彼、死んだわ』とその女は顔も上げずに忍び泣きして言ったのさ。——彼女はその寝台のそばにひざまずいていたよ。あの女には泣く訳が充分あったのさ。私の時代がやって来たのよ。

『お立ち』と言ってやったの。『お前がここに居る権利なんかないんだよ。お前が触れるとマーケル氏の遺体が汚れるわ。すぐこの家を出てお行き、——お前の時代は去ったのさ！』<sup>(2)</sup>

そう言い残して部屋を出たポーリィは物かげに身をひそめて、ジュリアの動きを見守る。赤ん坊をかかえたジュリアは腕時計を手に取り、金をふところに入れ、何かの用意に取りかかろうとしている。その機を逃がさず、突然姿を現わしたポーリィは、まずジュリアの行為は窃盗であると激しく叱責する。

サミュエルの妻として、家財を所有していると言うジュリアに対して、ポーリィは、すべては法律で決着をつけるべきであり、結婚にも法的証拠が必要だと応酬する。ジュリアはポーリィの悪質な計略にかかってしまったのである。

サミュエルの遺言に従って、机の錠を開けんとすると、それはすでに開かれており、勿論、引き出しの中は空である。ここにあった筈の、結婚を証明する書類を盗んだに違いない、返して下さい、と言うジュリアを平手打ちで倒したポーリィは、改めて起立を命じ、片手を椅子に、震える身体を支えて立っているジュリアを恫喝する。

『『お前は盗人だよ』と言ってやったのさ。『それに関してはね、証拠がある。盗んでいるところを捕えたんだよ。お前のふところにある時計は私のもの、金はマーケル氏の財産でね、それは私の姪、彼の娘のオリヴィアのものなんだよ。私はお前がそれを盗むのを見たんだよ。私の言葉はね、お前の言葉よりも百倍以上も値打ちがあるのさ。私は地位のある女性でね、お前は——何なの？ あのおね、よく聞くのよ、若しもお前が誰か一人にでも、唯の一言でも、この理屈に合わないことを口外したら、お前を窃盗の科で告発して、刑

務所に入れてやるよ。お前は子供を取り上げられて、二度と会うことは出来なくなるわよ。10分以内に、お前のぼろ着をまとめてこの家から、今日限り出て行きな。でもね、出る前に、盗品をそこの机の上に置いて行きな！<sup>(3)</sup>」

ジュリアは赤ん坊のジャンネットを抱えて、着の身着のまま追出されてしまう。彼女は侮辱され、痛めつけられ、人権を蹂躙んされ、社会的権利を剝奪されて、ウェリントン市の路上に投げ出されたのである。

ポーリィは自ら一女性に対して冷酷にもやってのけた人種差別と排外の行動を得意満面に語るのである。興味深く聞いているオリヴィアは何の心の咎も感じていない。ジャンネットの母から奪い取った書類について、彼女が機を見て問うのだが、ポーリィは過去の世界に没入してしまったのであろう、夢まどろむようにうわ言を言い始め、いつもの通り、昏睡してしまう。

伯母が奪った三通の書類が今もなお伯母の家に保管されているとすれば、それは今後、オリヴィアにとって、憂慮すべき、厄介な問題を生む火種となろう。こう考えると、彼女は底なしの不安に襲われる。

彼女が恐れているのは、権利書を奪って、ジュリアとその子をマーケル家から追放した、過去の事実が世間に露見することにあるのではない。この行為は、黒人の権利を認めないところの彼女のモラルに反するものでもなく、また彼女の属する、南部支配者階級のそれに反するものでもない。

彼女が恐れているのは、父サミュエルが、黒人女性に妻の権利と相続権を与える法的手続きを取っていたか、それを裏付ける文書を残していたのではないか、ということなのである。そうだとすれば、それは第一に、彼女の身内が残したスキャンダルとして彼女の社会的地位を傷つける、と彼女は考える。

「その種の書類——父の混血の愛人がばかばかしくも主張したというその権利を証拠立てるかも知れぬような書類を、伯母が本当に発見していたとすれば、どうであろうか。信用を危くするような文書を保管するのは、よくある人間の愚かさだが、伯母がその書類を保存していたらどうであろうか。家に

あるのが万一発見されたら、別に他に困った事は生じないにせよ、それはスキャンダルになるかも知れない、だから、万難を排してそれを避けねばなるまい。<sup>(4)</sup>」

彼女を訪ねて、これを確かめようとしたその日、ポーリイは何者かによって殺害され、オーチルトリー家の黒人召使がこれをまずオリヴィアに告げに来る。彼女は事件が外部にもれる前にオーチルトリー家にかけて、伯母の部屋に入り込む。彼女は検屍官が到着する寸前に、三通の書類を探し当て、これを密かに持ち帰る。

ジュリアがそれによって、自らの権利を証拠立て得ると、主張したと聞いた、その書類はポーリイの家に実在していたのであった。これを焼却することによって、マーケル家のスキャンダル——白人と平等な権利を黒人に認めることは物議をかもし、信用を落す、恥ずべき行為であると、オリヴィアと彼女を取り囲む社会は考えている——の材料は消滅する。スキャンダルの材料が消滅するだけではない。現にウェリントン市に住んでいる、ジャネットとその子供とが相続権を主張する上で欠くことの出来ない、法的根拠をも抹消し得るのである。ポーリイの話を耳にして以来、オリヴィアを襲った強い不安は消え失せて行く。

ジャネットを通じてジュリアに及んだ、激しい人種差別の思想と感情とが、オリヴィアの内面において、鎮まり始めると、彼女の掌中にある、ジュリアに関する法的文書は、オリヴィアがこれまでに充分認識することのなかった別の側面を見せるようになる。

この書類は、オリヴィアの親愛なる父、サミュエル・マーケルが、この世を去るに当って、妻と娘に残した遺書なのである。伯母がこれを奪って隠し、彼女も現にこれを隠し持ち、忌まわしいものとして、焼却しようとしている。

父は黒人女性ジュリアを愛人とし、母の死後同棲したのであろうか。また、伯母の話のように、遺産の大半はすべてジュリアとその子供に譲渡されたのであろうか。父は娘オリヴィアに、そのように冷たい人であったのだろうか。

彼女は書類を開こうとするが、特に相続権に関して、知識が乏しく、不安でならない。

彼女は仮の話として、夫に問うと、黒人女性が遺書をもとに白人男性の財産相続を主張しても、法廷の厳しい審査によって通ることはないと言う。司法上の差別に力ついて、彼女は封書を開くことになるが、これが、ジャネットに対して、差別の思想と観念とによって、固く閉ざされていたオリヴィアの心が開かれて行く、その始まりになろうとは、彼女は想像もできない。

これを契機に、彼女の心において、根強い人種嫌悪感——それはジャネットを経てジュリアに及び、さらに父をも巻き込まんとする——と力強い人間愛——これは父の行為を経てジュリアに及び、さらにジャネットを包含する——とがその場を占めんと激しく抗争することになる。

彼女が取り出した最初の書類は、父の筆になる法的文書であった。この書式をととのえた遺言状にある一項目は、特に彼女の眼をとらえて離さなかった。そこには、「ジュリア・ブラウンの子供、彼の娘ジャネット」に1万ドルとウェリントン市郊外の土地の一部を譲渡する旨記されていた。

父に言い寄って、その私生児ジャネットにこれ程の遺産を贈らせるよう仕向けた女、ジュリア・ブラウンを思うと、また、息子フェレックスが相続する資産の一部がジャネットに渡るとされたことを思うと、彼女は憤懣やるかたなく、この遺言状を暖炉の火に投じてしまう。彼女は紙が色を変じてくすぶり始め、炎がそれを包むのを凝視している。彼女は人種憎悪によって、父の遺した意志とジャネットの相続権を証する文書を焼却している。じりじりと焼ける、その焼け方はものを破滅させる憎悪そのものを示している。焼けた一枚の紙は、まだその黒い形を残して崩れをまぬがれている。この灰色に化した形の面に、ペン字の一文が黒く、際立って浮び出ているのが彼女の眼に入る。それは、興奮していた彼女の眼には映じたものの、読み取ることが出来なかった一文なのである。

「その他の、私の残余遺産のすべては、私の愛する先妻の子供、私の娘オリヴィア・マーケルに遺贈する。<sup>(5)</sup>」

彼女があわてて差し出した火かき棒に突かれた、この炭状に化して形を残していた遺言状は、ばらばらとその姿を崩してしまつて、白い灰となって炉床に残るのだった。ジャネットの相続権の明しとなる文書を焼却したオリヴィアは自らのそれをも焼却したのである。

差別による権利の侵害は差別する側にある人の権利をも侵害する元になることを、チェスナットは日常生活における末梢的行為の面においても描いている。

遺言状は焼失したが、父がオリヴィアに広大な農園と土地、莫大な財産を遺贈していた事実は、オリヴィアの父に対する従来の考え方に变化をもたらす。二人の間には、切っても切れない愛の絆が存在していた事を知ったのである。

彼女が開いたもう一枚の、薄い、折りたたまれた文書は、彼女に大きな衝撃を与えるものであった。それは、父が死亡する2年ばかり前のもので、サウス・カロライナ州のある郡役所が証明したものであるが、サミュエル・マーケルとジュリア・ブラウンとの結婚証書であった。彼女の父は、母エリザベスの死後、この黒人女性と正式に結婚していたのである。

オリヴィアが暮す時代にあつては

「白人と黒人との結婚は法律で禁じられていた。彼女はつい最近、この種の犯罪によって、白人女性と黒人男性の当事者双方が、長期間の懲役刑を言い渡された裁判記事を読んだばかりであつた。この一組は、法律に叛いて二人一緒に暮していた——二人は社会での地位が低いので、世間は彼等の私生活に目を向けはしなかつた——が、この地域にくまなく広がった宗教運動の影響を受けて、二人の結びつきに対して、神の祝福を得ようと、彼等は法廷でそう陳述したのだが、聖なる儀式を挙げんと試みたのであつた。ここにおいて、白色人種の純潔と威信とをどんな代価を払つても維持せんとするところの、高等なる法律が介入したのであつた。<sup>(6)</sup>」

チェスナットはここで、「地位が低い」、「高等なる法律」といった表現で、こ

の種の社会通念と差別法を有する社会を諷刺していることは言うに及ぶまい。

オリヴィアがこの結婚証書によって想起した裁判記事の中から、彼女の意識の前面に立ち現われた事実の一部分は、人種間結婚の罪とこの男女の社会的地位の低さである。彼女はこれを父の行為に関連させている。だが、彼女の意識の後部にはもう一つの事実が反映されている。それは、男女の真摯な愛は人種差別の壁を崩すという事実と、結婚は神によって、相互の人種の相違に関係なく、平等に祝福されるという、この男女の宗教的信念である。こともあろうに、州の法律は、これを犯罪と規定しているのである。

価値判断が、宙に浮いてしまった彼女は機械が動くかのように暖炉のそばへ近づいて行って、そこに呆然と立ちつくす。この証書を焼却する気は全くなかったが、彼女の手をすべり落ちた薄い紙は、すき間風に押されて火の上に舞い降り、またたく間に灰と化してしまう。

彼女が最後に開いた文書は、サミュエルの親友で、彼が遺言執行者に指定した弁護士ジョン・ドラマエに宛てた依頼状であった。

彼はここで、ジュリアとの結婚を全く悔いてはいないものの、これを世間に公表する勇気のない、弱さを恥じている。彼の心境を察したジュリアはこの結婚を口外しないと彼女の方から申し出ている。

ジャネットの相続が極めて僅かであるのは法廷で棄却されるのを防ぐためであり、また「ジュリア・ブラウンの子供、彼の娘ジャネット」となっているのは遺贈の根拠を婚姻による嫡子に求めず、血のつながりに求めることによって、結婚の事実に触れないよう計ったこと、これは取りも直さず、娘オリヴィアが父の行為によって、将来こうむる恐れのある、冷たい社会的風評を避けようとするものであったこと等、彼は秘密を厳守し遺言を遂行してくれるよう、ドラマエに依頼しているのであった。

三通の書類が灰と化した今では、彼女にとって、厄介な問題の火種はすべて消滅してしまった。だが、心に平和は訪れない。彼女は真実を知ったからである。人種嫌悪の故に忌避すべき存在であったジャネットは、彼女にとって、今

では別の意味を持って存在する。ジャネットは適法な婚姻により出生した、サミュエル・マーケルの子供であり、その適法性の根拠を自分が隠滅したという事実をオリヴィアに確認させる存在となったのである。

彼女は黒人女性との結婚証書を卑賤なるものとして焼失するにまかせた。人種間結婚によって有罪となった、社会的に地位の高くない一組の人びとを想起し、これを蔑む態度を取った。

「にも拘らず、彼女が知っている、そのような結婚の、もう一つの例を、彼女はないがしろにすることは出来なかった。それはこの街の誰もが知っている、実際に公にされた結婚の例であって、彼女の父と同じく、名家の白人男性が、南北戦争直後、この州が連邦政府軍の占領下にあった時期に、黒人女性と結婚したのであった。この結婚の適法性に疑問が寄せられたことは全くなかった。その後20年に渡ったこの結婚生活は充足した中で成就された。如何なる社会的迫害も、彼の夫としての地位を脅かしはしなかった。数年間の短い期間であったが、荒々しく介入して来た、南部に根を下した社会慣習に対する、生ける抗議の印として、彼は鉄の如き意志をもってこの街に踏みとどまったのである。従って、彼の子供が黒人として扱われ、彼が妻を伴って公の場に姿を見せることをしなかったにせよ、この結婚の法的有効性、あるいは子供の嫡出を疑う人はいなかった。」<sup>(7)</sup>

彼女は自分が焼いた証書の日付は、この人が結婚した時期と同じく、連邦政府軍による占領期間に当たっていたことを忘れはしなかった。不安になった彼女は正確に事柄を解明しておこうと、再び仮の話として夫に尋ねてみると、証書が取得された時期からいって、その結婚は法的に成立しており、相続の遺書も有効であり、遺書が残っていなければ、妻たる女性は不動産の $\frac{1}{3}$ 、動産と現金資産等の $\frac{1}{2}$ を相続する外、生涯、夫の家で暮す権利を有することが判明する。

彼女の父は、彼女がすぐれた人物として想起した、かの白人男性と異なって、人種間結婚を公表する勇気を持たなかった。彼は妻と子供の権利を公的に保障

させる道を選べない人であったが、病に倒れ、死期の近づくのを感じたとき、彼の死後、妻と子供の諸権利が奪われる恐れをも感じ、これを守る道を求めた。親友デラメアを遺言執行者として、ジュリアに封書を託したのがそれである。彼の死と同時にこの封書をポーリィが剝奪したが、それが可能であったのは、ジュリアが黒人であったがためである。ポーリィは差別社会を有力な味方につけ、自らの差別を遂行したのである。もし、ジュリアが白人であったら、それは不可能であっただろう。ポーリィの奪った封書の中身はオリヴィア自身が焼却してしまった。彼女は今になって、人種差別の恐ろしさと、自ら犯した罪が逃れようのないものであることに気づく。

かつて、ジャネットを目撃する毎に、神経を患って床についたオリヴィアは、今度は自己の行為に心を責められて床につくことになる。

〔注〕

- (1) Charles W. Chesnutt, *The Marrow of Tradition* (Arno Press, 1969), p. 135.
- (2) *Ibid.*, p. 135.
- (3) *Ibid.*, p. 138.
- (4) *Ibid.*, p. 177.
- (5) *Ibid.*, p. 258.
- (6) *Ibid.*, p. 259.
- (7) *Ibid.*, pp. 263, 264.

### 3

ポーリィ・オーチルトリー殺害容疑者として、ジョン・デラメアの黒人従者サンディ・キャンプベルが捕えられる。

ポーリィを殺し、金品を奪ったのはデラメアの孫トムである。彼は社会に流布されている黒人差別の観念——黒人は潜在的犯罪者であるという観念——を利用すべく黒人に変装し、人の見分けが難しい夕ぐれ時を選んでオーチルトリー邸を襲う。そして、盗品の一部をサンディに与えて行方をくらます。

黒人を犯罪者に予断するのは差別観念の一形態である。この小説が扱っている1890年代末を考えると、犯罪と疾病を黒人の特性であると論じた統計学者フレデリック L. オフマンの書『アメリカ黒人の人種的特徴と傾向』がもたらした影響が想像される。この書は1896年に出版され、南部社会の差別観念を助長した書の一つである。これは

「その後、多年に渡る期間、黒人に敵対する著作家達にとって資料と判断とを提供する第一級の源泉となった。<sup>(1)</sup>」

とジョージ M. フレドリックソンは述べている。

また、この時代は黒人の参政権を奪って、黒人全体を政治的、経済的、社会的に隷属させようとする運動が支配者層によって遂行されていた。黒人に対する政治的権利の制限、あるいは剝奪が自らにも及ぶことを懸念し、これを恐れる貧しい白人大衆が黒人と手を結んで抵抗することは十分に予想されることであったから、支配者層は白人大衆を黒人から離反させるために、ジャーナリズムを使って、盛んに黒人差別の観念を、彼等の間に流布させた。

チェスナットはオーチルトリー殺人事件を設定して、これに対するウェリントン白人社会の動向を、政治政策の面で描く。

この事件の報に接して、ウェリントン市の三大政治ボス、カーターレット、バルモント、そしてマクペーンの三者はモーニング・クロニクル社に集まる。

事件そのものが解明されていないにも拘らず、彼等はこれをつぎのように、人種差別主義の観点でとらえ、それに対応する。

「『これは』とカーターレットは言う。『通常の法的手続きにもとづいて扱われるような、並みの犯罪ではない。これは我々白色人の一女性——我々の荣誉と華である婦人の名を借りて、我々白色人に加えられた残念極まりない襲撃だ。この種の犯罪は、即座に、容赦なく処罰しておかねば南部白人女性全体が危険にさらされることになろう。<sup>(2)</sup>』」

彼はこの事件の原因は黒人票を吸収した共和党と人民党との連立派が州政、市政に進出し、黒人が白人に対して傲慢になったためであると言う。

黒人憎悪の体現者であるマクベーンは

「『その黒奴を焼き殺すのだ』とくり返して言った。『俺達は犯人そのものを捕えているようだが、それはどうでもいいことだ、黒奴を一人焼き殺すのだ。この事件は、ある黒奴の名において、黒色人が、オーチルトリー夫人の名を借りて白色人に加えた襲撃なのだ。如何なる黒奴を焼き殺しても白人はその行為を正当視されよう。間違つて別の黒奴を焼き殺せば、見せしめの効果はうんと上るといふものだ。それは俺達が、黒奴一人の非行を黒人全体の責任と見なすことを奴らに通告する助けとなろう。』」<sup>(3)</sup>

マクベーンが暴徒の先頭に立つというのに対してカーターレットの、対応の仕方は極めて巧妙である。

「我々がこの黒人を処罰するのに、わざわざ手を貸すことはないと思う。表の騒動から判断すると、群衆が事を決定しそうだ。私としては、暴力行為は、それが如何に正当化されるものであつても、いずれも私が直接介入することなく発生するのが望ましい。』」<sup>(4)</sup>

彼は社会においては差別の実践者であるが政治、経済の分野にあつては差別の利用者たる立場を取つている。これはバルモントの場合にも言える。

「どうせ起るべきことだったら、この事件は、例えばこれから3カ月後の、選挙の前夜に起きてもらいたかつた……」<sup>(5)</sup>

白人暴徒を動員して、黒人有権者を襲撃させて脅かし、投票所に近づけないようにするというのである。

3カ月後の選挙日を念頭において、黒人と黒人の側に立つ白人市民を排除するために、人種憎悪の感情を深めるべく、『モーニング・クロニクル』社はオーチルトリー事件について号外を出し、差別キャンペーンが展開されることになる。

郡拘置所を取り囲んだ群衆の手でサンディがリンチにかけられる予定であり、それがその日の夜に行われることが判明した時期に、彼の雇い主であるジョン・デラメアの究明によって、オーチルトリー殺しはデラメアの孫トムの仕

業であることが動かぬ事実となる。

デラメアは旧奴隷制下にあつては大農園主であり、現在も大資産家としてウェリントン市の政界、財界に影響力を及ぼしている。サンディとの間には主従関係が確立しており、彼は家父長の責任と義務によって、サンディを救出しようとする。彼はトムを犯罪を公表してサンディを釈放し、その身柄の安全を保障するよう、カーターレットに要求する。

無実が明らかになった、有力者の黒人従者をリンチ殺害することは難しい。サンディを釈放するには、法廷だけではなく、煽動して集結させた、リンチ殺害を叫ぶ群衆をも納得させる必要があり、そうなるとトムが犯罪が明らかになる恐れがある。この若者は顔に墨を塗り、変装して、罪を黒人にかぶせたのであり、その手口はカーターレット達のものに似ており、これも露見する。さらに、デラメアの要求通りにすれば

「何年間にも渡って、南部が伝え送ったところの、南部白人に対する北部の共感を得ると共に、黒人に対する北部の気持をそむかせる上で、大いに効果のあった、暴行に関するさまざまな報道記事に対して疑いの影がさすことになろう。<sup>(6)</sup>」

カーターレットとベルモントは対策を練った後、有力市民、そのなかには治安判事もいるが、数十人をモーニング・クロニクル社に集め、街で生じている騒動を静めるための、事実の一部を認めた捏造された真相を発表する。

犯行時間にサンディはデラメアと共に過していた、として無実の立証がなされるが、真犯人は逃亡して不明とされる。強いられて宣誓するデラメアの言葉は白人の有力者であるが故にその場で信用される。有力市民の動きで拘置所を取り囲んだ群衆は姿を消す。

法廷ではカーターレット家の医者プライス博士がオーチルトリーの検屍結果を報告する。これはトムを事件からかくすために行われる。オーチルトリーの死亡は傷害によるものではなく、強盗事件に遭遇した際に受けた精神的ショックが原因とされ、頭部の傷は卒倒の結果生じたものであると報告される。殺人

事件は、誰かが行った、小さな強盗事件にすり替えられて決着がつく。街を離れているトムはいずれほとぼりの冷めた頃、もどって来る筈である。

チェスナットがここに描いているような、司法、警察の分野で不正行為と人種差別とが横行し得るのは、制度的にあって、その余地が存在するためであり、ガンナー・ミュルダールはこれをアメリカでは司法、警察の役職が地域住民による選挙に依存している点に求めている。

「判事、検事、法廷官吏、保安官、警察署長は、小さな町では警察官全員が、投票によって期限付きで選任されるか、または、その職が、選出の見通しが定かでない議員達によって左右されるかのいずれかである、……司法および警察の役職が直接、普通選挙——即ち、その地域の世論と地域の政治ボス——に依存していること……司法の運用がその地域の選挙民に依存しているという事実は、世間一般が嫌う少数派集団、特にこれが南部における黒人の如く、参政権が奪われている場合、この少数派集団に対して、当然のこととして、差別が加えられ勝ちである。選任された判事は、彼も遅かれ早かれ、選挙を受けねばならず、また、その地域の世論に反するような判決を下せば、その地位を失う恐れのあることも知っている。<sup>(7)</sup>」

カーターレット、ベルモント、マクベーンの三大政治ボスを頂点に、数十人の有力市民はウェリントン市の権力機構に介入し、ジャーナリズムによって世論を操作し、リンチ殺害によって、無防備状態に置かれた黒人大衆を恫喝し、彼等から参政権を奪う一大勢力を築き上げて行く。

1890年代を通して20世紀初頭に及ぶ、南部における黒人参政権剝奪の運動について、C. ヴァン・ウッドワードはつぎの如く述べている。

「運動の指導者達は白人優越、黒人嫌悪、人種排外の徹底したプロパガンダを復活させた。そのようなキャンペーンはどの州においても参政権剝奪に先立って行われ、またこの権利の剝奪を伴ったのである。……ジョージア州においても、その他の州でも、このプロパガンダは黒人の犯罪、告発された暴行事件、暴行未遂、また、黒人が横柄で、無礼で、無愛想だという申し立

て、あるいは卑屈な態度に欠けるとか、それが不充分である、とかいった俗受けのする犯罪をヘッドラインに掲げて、これに積極的に加わった、煽動的な新聞によって助長された。<sup>(8)</sup>」

オーチルトリー殺害事件は強盗事件に変えられ、真犯人の正体は不明とされて、騒動は収拾されるが、通信組織を通して全米に報道された黒人による白人女性殺害事件のニュースは黒人全体に対する憎悪と偏見を深めたまま放置され、サンディ無実の記事は紙面の人目につかぬところで、小さな活字で綴られるだけであった。

さて、オーチルトリー事件を利用し損じたカーターレット達はウェリントン市の黒人新聞『アフロ・アメリカン・バナー』の社説に白人大衆、特に男性の反黒人感情をそそる上で、最も効果のある題材を見つけ出す。それは数カ月前の社説である。

「その論説はリンチ殺害事件とその原因に関して、素直に、またいくぶん大胆に論じたものであった。そこでは、リンチ殺害の原因の殆どは、この行為を正当づけるために、一般に非難が浴びせられているような犯罪にあるのではない、とこれを否認し、リンチ殺害の原因が犯罪にあるらしく見えるものでも、その多くは全く犯罪に当るような性質のものではなくて、自然界も宗教も、また他の諸州の法律も、そこに如何なる、越え難い障壁をももっているところの、人種間の結婚を犯罪であるとする、黒・白結婚・同棲禁止法——この法律によって南部の全州では契約の自由を破壊して、奇抜な人種純血を維持せんとしている——が存在するところから、当然それが予期されるところの自発的行為なのである、と説明しているのであった。<sup>(9)</sup>」

この社説の内容は事実を報告したものであるばかりでなく、チェスナットの<sup>(10)</sup>見解でもある。

さて、『アフロ・アメリカン・バナー』はその社説で、白人達が秘密にしている、殆ど自ら認めようとしぬ事実を黒人の手で新聞に明らかにすべきだと結んでいた。

マクベーンは激怒して言う。

「この黒奴をリンチにかけてやれ、この新聞をぶつつぶせ、新聞社を焼き払ってしまえ。」<sup>(11)</sup>

カーターレットにとっては

「この論説は最も悪質な形をとった人種不敬罪であった。」<sup>(12)</sup>

黒人の政治的、社会的諸権利を奪い取るべく、南部保守勢力が展開した黒人排外が、特に激しかった1890年代にあっては、黒人男性リンチ殺害事件と、これを招く原因とされた白人女性暴行事件との事実関係を究明すること自体、南部における黒人ジャーナリストにとっては、危険な仕事であった。何故なら、それは南部白人社会が、触れられることを最も恐れ、明るみに出されるのを最も嫌った事実が存在するからであった。

その一つは、白人女性暴行、あるいは未遂事件なるものは、その殆どが捏造であって、リンチ殺害は政治的意図のもとに行われているという事実、もう一つは、白人女性達が人種を差別し隔離する諸法律をかいくぐって、積極的に黒人男性と親密な人間関係、あるいは恋愛や情愛の関係を持って来たという、差別打破と女性解放の意義を持つところの事実である。

1892年、テネシー州メンフィス市の黒人新聞『フリー・スピーチ』は5月21日付で、8名の黒人がリンチ殺害された事件を報道し、そのうち5名が白人女性を暴行したと言われているが、

「この地方では黒人が白人女性を犯す、などという古臭い嘘を信用する人は誰一人としていない。南部の白人男性は気をつけてことに当らないと、やりすぎて失敗し、世論の反発を買うことになる。要するに、白人、黒人いずれの側の男性がその女性達の品行上の評判を落しているのか、その結論が出てしまうというものだ。」<sup>(13)</sup>

と書いた。この記事は市の有力者達の憤慨するところとなり、『フリー・スピーチ』社の経営主は暴徒から身を守るために街を逃げ出す結果となり、新聞社は

市民の手で破壊されてしまった。ちょうどニュー・ヨーク市で休暇を取っていた編集長、黒人女性アイダ・ウェルズは危く一命をとりとめたが、二度とメンフィス市へもどることは出来なかった。

彼女は1892年10月『南部の恐怖——リンチ法の全貌』をニュー・ヨーク市で出版し、リンチ殺害の真相と黒人男性と白人女性との親密な関係とを明らかにした。

「メンフィス市のサラ・クラークは黒人の男性を愛し、彼と二人で公然と暮らしていた。昨年の春、人種間結婚・同棲の罪で起訴されたとき、彼女は法廷で、自分は白人の女性ではありません、と宣誓した。彼女は服役を避け、また、この禁制の関係を妨げられることなく保ち続けるために、そのような宣誓を行ったのである。……

『フリー・スピーチ』の経営主が南部白人女性の名譽を守護する男達によって追放されてからのことだが、ウィル・モーガンという名前の、混血黒人の美男子と親しい関係にあることが人に知れてしまったのだが、ポプラ通りに住んでいた若い女性は、激怒する彼女の父親の手からこの若者を逃がすために、父の金を盗み与えた。その後彼女はシカゴ市で彼と一緒にになった。……

ありとあらゆる白人の女性を防衛すると言って、メンフィス市の“有力市民達”がぶざまなところを見せた、まさにその週に、アフロアメリカ人 M. ストリックリンはその街のある白人女性の部屋にいるところを見つけ出された。この女性は犯されたという悲鳴を上げはしなかったが、彼は収監され、リンチにかけられるところであった。しかしこの女性は彼からカーテンを買い求め（男は家具販売業者であった）、彼はその夜、カーテンを掛ける仕事があつて、彼女の部屋にいたのだ、と言明したのであった。この白人女性の言葉は、この場合、犯されたという悲鳴が信用されるのと同じ程度に信頼され、この男は釈放されたのである。……

1892年1月1日、テクザファカナで生きたまま焼き殺されたエドワード・コイは無実であると抗議しながら死んで行った。……11月の調査ではつぎのこ

とが明らかになった。

『1. 暴行の犠牲者として行列行進に出されたこの女性は性質のよくない人であった。……』

2. 彼女は一年以上もコイと法的に許されない、ねんごろな関係にあったことが報じられており、広く知れ渡っていた。

3. 彼女は、暴力は加えられていないにしても、脅しによって、この犠牲になった男に罪を着せるよう強制されていた。

4. 彼女が彼と対面して決着をつけることになった時、コイは彼女に、二人がそんなに長い間「愛し合って来た」のに、彼を生きたまま焼き殺すことにするのかと尋ねた。

5. この事件で主要な働きをした「優れた」白人男達は混血の子供を生ませている、名高い親父さん達である。……』……<sup>(14)</sup>』

以上はウェルズが掲げた多くの例の一部にすぎないが、白人の女性側から、人種差別の壁が打ち砕かれてゆく事実注目する必要がある。差別者達はこの事実を眼をおおい、差別からの解放を婦女暴行にすり変えて黒人男性を殺害し、白人女性を恫喝し、これを鎮圧しようとして来たのである。

『アフロ・アメリカン・バナー』の社説はカーターレット達を激怒させるだけではなく、長期に渡って流布されて来た差別観念の影響下にある白人大衆を立腹させるに充分である。カーターレットはこの社説に、敵意をかき立てる論評を書き加え、『モーニング・クロニクル』に再掲載する。その効果は直ちに現われる。

「それは南部白人男性の最も感度の高い部分に触れるものであった。白人男性にとって、そのような論説は白人女性に対する侮辱であり、何らかの行動によって、その憤懣を示すべきものであり——単なる言葉による対応は意味をなさないものであった。そのような問題について議論に応ずることは、黒人との平等と、さらに黒人が白人の行為について論じたり、批判したりする権

利とを認めることになろう。<sup>(15)</sup>」

政治ボスの策略は下部組織を通じて進行する。これまで店頭や窓口で接して来た白人が黒人に対して口を利かなくなる。白人市民達が武装し始める。黒人に対する武器の販売路が遮断されていることに黒人は気づく。市の人口の  $\frac{2}{3}$  を占める黒人達のうち、上層部にある人びとに、市から退去するよう、誰からともなく脅迫の電話が入る。市の有力者が経営する武装警備会社が大がかりな射撃訓練を開始する。黒人の間に動揺が生じ、不穏な噂が流れ、山間部へ避難する者も出て来る。

カーターレット達は州および連邦政府の介入を避けるべく、巧妙に人種暴動の準備を進めて行く。

〔注〕

- (1) George M. Fredrickson, *The Black Image in the White Mind* (Harper Torch Books, 1971), p. 249.
- (2) Charles W. Chesnutt, *The Marrow of Tradition* (Arno Press, 1969), p. 182.
- (3) *Ibid.*, p. 182.
- (4) *Ibid.*, p. 183.
- (5) *Ibid.*, p. 183.
- (6) *Ibid.*, p. 228.
- (7) Gunner Myrdal, *An American Dilemma*, Vol. II (Pantheon Books, 1972), p. 523.
- (8) C. Vann Woodward, "Folkways, Stateways and Racism," reprinted in Allen Weinstein and Frank Otto Gatell eds., *The Segregation Era 1863-1954* (Oxford University Press, 1970), p. 82.
- (9) Charles W. Chesnutt, *op. cit.*, p. 85.
- (10) William L. Andrews, *The Literary Career of Charles W. Chesnutt* (Louisiana State University Press, 1980), p. 140.  
 Frances Richardson Keller, *An American Crusade: The Life of Charles Waddell Chesnutt* (Brigham Young University Press, 1978), p. 168.  
 Sylvia Lyons Render, *Charles W. Chesnutt* (Twayne's Publishers, 1980), p. 88.

兩人種間の男女の交わりについて、チェスナットは、1902年5月9日、下院議

員 F. D. クランバッカーにあてた書簡でこう述べている。

「そのような交わりはこれまで大いにあったし、白人側の完全なる合意と嬉々とした協力のもとになされたのであり、これまでのところ、何一つわずらわしい結果が生み出されたとは思われません。」〔Helen M. Chesnutt, *Charles Waddell Chesnutt: Pioneer of the Color Line* (The University of North Carolina Press, 1952), p. 181.〕

- (11) Charles W. Chesnutt, *op. cit.*, p. 86.
- (12) *Ibid.*, p. 243.
- (13) Ida B. Wells, "Southern Horrors", *On Lynchings* by Ida B. Wells-Barnett (Arno Press, 1969), p. 5.
- (14) *Ibid.*, pp. 8-10.
- (15) Charles W. Chesnutt, *op. cit.*, p. 248.

#### 4

サミュエルの遺書と彼のジュリアとの結婚証書を焼却した事はオリヴィアにとっては、彼女の人種差別の思想と論理によって、正当化されようが、法的手続きを経て取得された証書や法的に有効な権利書をそうすることは、法律上、また道徳上も、正当化しようがない。

サミュエルとジュリアは共に他界しているが、嫡子であり、相続の権利を付与されたジャネットは実在する。この女性は彼女とサミュエルの血を分ち持っている。

かつて忌避の対象となった人物は、そこに彼女が印したところの不正を映し出す人物へと変化して行く。つまり、ジャネットは彼女の良心の呵責の種子に変わる。

それはカーターレット達が仕組んだ人種暴動が勃発する日の前夜であったが、彼女は悪夢に苦しめられて目覚める。この夢には彼女が無意識の領域で行っているところの、ジャネットに対する、心的行為が反映されているので、引用してみよう。

息子フェレックスとヨットを楽しんでいると暴風雨に見舞われて海に投げ出

される。

「……子供を抱き抱えた彼女は、つぎの瞬間、子供の頭を水面に支え上げて水のなかをもがいているのであった。何か眼に見えない力によって支えられているかの如く、彼女が海に漂っていると、遠くに一艘のボートが波浪を突いて近づいて来るのが見えた。ボートは真直ぐに彼女に向って来たので、そのふちにつかまらんと手をのばすと、漕ぎ手がふり向く。見上げるとそれは彼女の妹であった。姉と妹であることがお互いに分った。するとボートはぐいとひと漕ぎ、彼女のさし出した手に空を握らせたまま、そばを滑るように過ぎて行った。

彼女はいつの間にか力が抜けて行くのを感じた。必死で片方の手を振ったが漕ぎ手は無言のまま、咎めるような一瞥を投げかけ、そのまま漕ぎ去って行った。カーターレット夫人の力はだんだん衰えて行った。子供は鉛のように重くなって来た。彼女だけはそれが生れつき備わった特性でもあるかの如く、水面に浮んでいるのだが、子供を支えることが出来ない。子供は下へ下へと引き込まれ——彼女はそれを救い上げる力も、また水中にもぐって行く力もない——無我夢中に息をつごうと喘いで、小さな手を突き出してもがいていたが、とうとう水は冷酷にもその頭上に逆巻き、子供は沈んで行った——その時、彼女は身震いして目覚め、しばらくおののいて横になっていたが、やがてドディが子供の寝台で苦しそうな息遣いをしているのに気づくのだった。」<sup>(1)</sup>

ヨットから波浪高い海に投げ出された彼女とフェレックス（愛称・ドディ）はポーリィによってマーケル家から追い出された「ジュリア」と「ジャネット」親子を意味する。この二人を見捨てて漕ぎ去ったジャネットは「ポーリィ」であり、さらにその不正の後継者「オリヴィア」である。また、海に投げ出されているオリヴィアは「ジュリア」でもあるが、そのうち、自分自身だけが浮上して水没しないという状況は「ジュリア」の側面ではなく、オリヴィアその人のものである。しかし、この恐しい夢の持つ意味を熟考すれば、水没するフェ

レックスを抱き抱え、これを救い出そうとする行為はフェレックス＝「ジャネット」、つまり、ジャネットを水溺させまいとする無意識の行為でもあり、そこにオリヴィアの良心が浮上するのを見ることが出来る。彼女は苦悩に痛めつけられ、良心の呵責に傷つけられることによって、被害者の側に、傷つけられた人びとの側に立つことが出来るようになっていたのであった。

結婚証書と遺書を焼却する前のオリヴィアとその後の彼女の間には大きな変化が見られる。彼女は差別観念、あるいは思想を実践に移す、つまり、内的行為を外的行為に現わして、これを現実には直視することによって、差別の不正と恐しさにと気がついたのである。

彼女は父と黒人女性との結婚、その子供の嫡子たる権利を進んで容認出来れば、良心の呵責から解放されることを知っている。それには、これを証拠立てる文書の実在とその焼却をジャネットの前に認めることが彼女にとって可能でなければならない。彼女がそこへ踏み出して行こうとするとき、それをためらわすものが二つある。一つはジャネットが総資産  $\frac{1}{2}$  の相続を主張することが考えられ、もう一つは父と黒人女性との結婚を明かすときに生ずる社会の風評である。前者は純然たる相続権の問題であって、そこに人種問題は介在していない。彼女はジャネットの権利とその主張を念頭に入れることが出来ているのである。後者は彼女の内部にある差別観念による面もあるが、それは以前の如く、主体的、積極的な力と中身はなく、彼女の方で、社会に存在する差別に対して、これにおびえ、尻込みする状態にある。彼女はこの二つの問題の解決を避け、なおかつ良心の呵責を鎮めんとする。帰着するところはジャネットの夫ミラーが経営する病院へ、父が遺書に記したと同額の金を寄附することであった。この結論に到達したのは夜も明ける頃である。彼女はやっと眠りに就くことが出来る。

4 百名に近い白人暴徒が黒人居住地区に侵入して、建物に放火、黒人を多数殺傷し、幾百の人びとを街から追い払った、1898年のノース・カロライナ州ウ

イルミントン人種暴動の始まりをチェスナットはつぎのように描く。

「ウェリントン暴動は暗い行いのために、敢えてえり抜かれたかの如く、よく晴れ渡った日の午後3時に始まった。サファイア色の海に浮ぶ、遠くの島影のように、空高く、白く、羽根のように、わずかに漂う明るい雲を除いて、空は快晴であった。数マイル向うの海から吹き寄せる塩風が大気にきらめきを添える。

3時かっきりには、不思議にも路上は武装した白人の男達でいっぱいになった。……通行中の黒人の男達は、最初出食わした白人の男に、両手を挙げよ、と命令された。これに応ずると、武器を所持していないか、確かめるべく、かなり手荒に嚴重な身体検査をされ、表通りに出るなと警告された。……呼び止めた男達の強要に反抗すると——しかし、それは述べるまでもなく、この日の事件は歴史に記されている……」<sup>(2)</sup>

黒人有力者を街から追放し、有権者を恫喝して投票の妨害を行い、黒人の側に立とうとする白人をも威圧することによって、政治目標を達成させるのがカーターレットの目的であったが、『モーニング・クロニクル』の煽動によって反黒人感情は高まっており、強硬派を代表するマクベーンに導かれた暴徒は放火、殺傷を行い、これに少数ではあるが黒人側から反撃がなされるに及んで示威行動は夕方には大規模な人種暴動と化してしまう。

帰宅したカーターレットを待っていたのは息子フェレックスの急病である。彼は呼吸困難に陥っている。プライス医師は暴動に掛り合うのを恐れて街にはいない。騒乱によって電話が通じなくなっている。薬局も氷屋も店を固く閉ざしている。彼は歩いて訪ねて行くがアッシュ医師もトムプソン医師も往診に出ている。老医師イエイツは負傷している。いずれも暴動が原因である。若い医師エヴァンズを連れて帰宅するが、息子には切開手術が必要であって、この医師の手にはおえない。医師はもういない。窮地に置かれたカーターレットにエヴァンズはもう一人外に有能な医師がおり、この人が来てくれたら息子の生命は救われる、その人はミラー博士だと言う。

カーターレットは黒人の社会的平等を認めないから、かつてバーンズ博士の要請をも蹴ってミラーの治療を拒絶したが、今回は例外処置を取る。それは彼の黒人“劣等”論を維持する形で行われる。ミラーに往診を求めるのは、“優越”人種、白色人が“劣った”人種、黒色人に恩恵を授与するためであるとされる。

「この医師が往診を断わることなど彼は想像もしなかった。黒人にとって、それは断わることの出来ない、大いなる榮譽であろうから——」<sup>(3)</sup>

しかし、ミラーがこの恩恵なるもの、“榮譽”を一蹴したら、カーターレットにはすがりつくものが間違いなくあった。

「……彼は職務上、往診を拒むことは恐らく出来まい、——医師の倫理によって余儀なく応ずるだろう。」<sup>(4)</sup>

彼はこれを切り札に使うつもりであるが、この切り札は、彼がミラーとの関係で保持しようとする人種の上下・優劣関係を破壊するものである。何故なら彼はミラーとの関係を医師と患者との役割、それに伴う義務と責任の関係でとらえているのであるから。この役割関係を占めるのは平等な人権を付与されている人間である。

エヴァンズがミラーに会って往診を依頼することになるが、拒絶される。ミラーはかつて第三者バーンズ博士の要請によって、フェレックスの治療に当ろうとしてカーターレットに拒否されている。第三者でなく本人から直接求めがない限り応じられないと言う。

「『その通り、全くその通りだ』とカーターレットは答えるのだった。『彼の意見は正しい。私が直ぐ出かけよう。私の子供はミラーに来てもらうまで、生きて——生きているだろうか?』」<sup>(5)</sup>

あと半時間はもつと言われて、彼はミラー邸へと走って行く。愛する息子が死が迫って来るなかで、彼はまず黒人と白人とが社会的に平等であることと、人種間に人間として優劣のない事実を、あたふたと学び取っているのであった。

ミラー邸を正式に訪問したカーターレットは恐しい、悲しい出来事を直視す

る。ミラーの一人息子が暴徒の撃った流弾で死亡しており、その愛児の遺体にはがってミラーの妻が嘆き悲しむのを見た。その女性は妻オリヴィアと瓜二つ。彼もミラーと同じく、息子を失って悲しむ父となるのだろうか。

ミラーは往診に出られないと言う。彼は悲嘆にくれる妻を一人に出来ないばかりか、彼女の生命を守らなければならないのであった。暴徒の放った火でウェリントン市の夜空が燃えている。彼等はいつこの家を襲うか分からない状態である。カーターレットは自ら策動した政治的謀略の結果をここに見るのだった。

「ミラー医師の立場にあつたら、彼もまた同じ行動を取ったことであろう。……毅然と勇気を奮い起し、口をぎゅっと結んで、医師その人よりもむしろ天命にそうするかの如く、機械で動かされるように頭を下げると、彼は背を向け、この家から出て行った。<sup>(6)</sup>」

彼の人種差別の思想と観念は崩れ落ちて行くのであった。

ミラー医師が来れない理由を聞くとオリヴィアは狂乱したかの如く家を飛び出して行く。ミラーはカーターレット夫人に対して、その夫に述べたと同じ理由でこの場を動くことが出来ないと言う、彼女はジャネットに訴える。

「同じ父から生れた二人の子供が初めて顔を見合わせるのを、もの言わずに目撃している、幼い子供の遺体をはさんで、二人の女性は対面するのだった。お互いに深い心の痛みにひしがれて、向い合って立っていると、彼がカーターレット夫人を家に通したとき感じたよりも、この二人は驚く程よく似ていた。しかし、偉大なる平等主義たる死は、一方の手を一人に振り下ろし、他の手でもう一人を脅かしつつ、この二人の女性の姿に信じがたい程の変貌をもたらしたのである。悲しい瞳のジャネットは懲罰の女神のように、相手を射すくめるような様相でつつ立っていた。他方は、高い自尊心がその生命であった人だが、おろおろした哀願者の物腰で立っていた。<sup>(7)</sup>」

ジャネットは、それによって息子の生命が奪われたところの、オリヴィアの夫が中心になって策動した人種暴動と彼女を蔑んで来たオリヴィア自身の差別

性とを激しく非難し、この場を去るよう要求し、ミラーの往診を拒否する。遺体にながって号泣するジャネットにそうなるであろう自分の姿を見るとオリヴィアは彼女を抱きしめて、これを妹と呼び、血を分けた甥フェレックスを救ってくれと訴える。そして、そこで一挙に告白する。父サミュエル・マーケルとジャネットの母ジュリア・ブラウンとの結婚証書に関して、また相続について。しかし、それはジャネットを憤慨させるだけであった。

「『私はあなたの父親の姓も、その富もあなたの妹だという認知もあなたに投げ返すわ。そんなのはいらないわ、——それは買うのに高すぎる！……でも女というものは不当な目に遭わされても、自分を傷つけた人に対してでさえ、思いやりの心はあるものだ」と知っておくがいいわ、夫がそれを救えるなら、あなたは子供を死なさずにおけるかも知れないわ！』 彼女は隣室の戸をさっと開けて言った。『ウィル、この人と一緒に行っておあげ！』<sup>(8)</sup>

オリヴィアは妹が言った冷たい言葉は本気じゃない、きっとまた会いに来て、その言葉を撤回してもらいと、感謝しつつも言い返して、ミラーと共に夜の中に消えて行く。オリヴィアとジャネットとはいつの間にか姉妹関係を確立させ、口論しているのであった。ミラー医師はカーターレット邸に玄関口から入る。出迎えるカーターレット。

「『子供は未だ生きてますか？』とミラーは尋ねた。

『はい、有難いことに』と父親は答えた。『でも死にかけているのです。』

『ミラー博士、上って来て下さい』とエヴァンズは階段の上から呼んだ。『時間は充分ありますが一刻の猶予もありません。』<sup>(9)</sup>

差別の壁はカーターレット夫婦とミラー夫婦の双方の側から掘り崩されたのである。

ここに描かれているカーターレット夫婦は支配階級に、ミラー夫婦は当時その数の少なかった黒人中間階級に属する。チェスナットは差別と階級とのからみ合いを政治政策の面で描いているが、彼はこの作品で、人種、階級、身分にかかわらず、人間は生れながらにして平等であって、すべての者が、生きる

権利，自由である権利，そして幸福を求める権利を付与されていることを強調したのであった。

〔注〕

- (1) Charles W. Chesnutt, *The Marrow of Tradition* (Arno Press, 1969), pp. 268, 269.
- (2) *Ibid.*, p. 274.
- (3) *Ibid.*, pp. 317, 318.
- (4) *Ibid.*, p. 318.
- (5) *Ibid.*, p. 319.
- (6) *Ibid.*, p. 321.
- (7) *Ibid.*, pp. 325, 326.
- (8) *Ibid.*, p. 329.
- (9) *Ibid.*, p. 329.